

《一》 次の文章は、たわらまち 俵万智『生きる言葉』の「はじめに」の部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。(字数制限のある問題については、句読点も一字に数える。)

いま、言葉の時代だと思う。写真や動画が、かつてないほど手軽に撮れて発信できるので、「いや、言葉よりも画像の時代でしょ」と思う人が多いかもしれない。確かに、仔猫の可愛さをわかってもらうためには、百の言葉を費やすより、一枚の写真や数秒の動画のほうが A ユウベン……ということはある。

けれど、コミュニケーションということに関しては、時代の中で言葉の比重は増しているように思う。たとえば、生まれ育った村で一生を過ごすとしたら、周囲の人とのやり取りは、言葉以外のものがたつぷり助けてくれるだろう。なんなら、笑顔を見せるだけで、こぶしを突き上げるだけで、いつもと違う服を着ただけで、あなたの気持ちを伝えられるかもしれない。ひと言つぶやいた「いやだ」という言葉の背景に、小さいころからの性質や日ごろの習慣や最近の体調なんかも加味して、理解してもらえるかもしれない。小さなコミュニケーションでは、わかりあうための情報として、言葉は数あるものの一つに過ぎない。同じ言葉を発しても、「この人が言うんだから、よほどのことだ」から「また言ってるよ、しょうがないな」まで ① グラデーション付きで伝わってゆく。

「村で一生」は B キョクタンな例だが、このような「個人の言葉の背景を理解してもらええる環境」ではないところで、多くのコミュニケーションをしていかねばならないのが現代社会だ。家族や友人、恋人同士などはこの限りではないけれど、行動範囲がグンと広がり、ネットでのやり取りが日常になっている今、背景抜きの言葉をつかいこなす力は、非常に重要だ。それは、生きる力と言ってもいい。村の道なら、すれ違いざまに肩が触れたとして、「あ、ごめん」と顔見知り同士が軽く会釈をすればすむ。それがネットでは、大事故になったりする。相手のバックグラウンドを知らないまま始まる言葉の応酬。そもそも前提としている常識が違えば、互いに「なんて非常識な！」ということになる。イメージとしては、② 違うルールで高速道路を走っているようなもの。さらにSNSの場合、事故で燃えている車があるという情報が広がると、消火活動よりも、な 何故か油を C ソソぎに来る人が D ムラがるという傾向がある。いわゆる炎上という現象だ。

便利で、やっかいな時代を、私たちは生きている。顔の見える関係が広がった先に、さらに顔の见えない関係が追加された。「顔」といえば、思い出すエピソードがある。電車の中で「面と向かって電話した」と聞こえてきたのだ。その時の驚きを E セツチヨ『言葉の虫めがね』に綴っているので、抜粋してみよう。1999年出版のエッセイ集なので、今から四半世紀前の言葉の観察記録である。

*

あるとき電車に乗っていたら、若い男の子が「オレ、そんなときはばかりは腹立って、面と向かって電話しちゃったよ」と言っていた。③ 「ん？」と思つて耳をダンボにする私。面と向かえないから、電話をするのではないか？ この子は「面と向かう」を間違つて使っているのだろうか……。が、よくよく聞いてみると(失礼！)そうではなかった。話は、こうである。

その男の子は、日常的にパソコン通信をしているようで、近ごろ通信相手とかなりひどいトラブルがあった。ちよつとしたことなら、電子メールで F コウギするぐらいですませるのだが、あまりに頭にきたので、そのときばかりは電話をかけて文句を言った——と。つまり、電話をかけて肉声で直接話すというのは、彼にとっては立派な「面と向かう」行為なのである。

私たちの日常において、電話というのはかなり「濃い」コミュニケーションの部類になつてきているようだ。かつて電話が登場したときには「そんな、直接顔も見ずに、機械を通して話をするなんて、非人間的だ！」という意見があつたそうだ(この話にはオチがついていて、電話を使って人々がまず何を話したかというと、次に会う約束についてだった、とか)。

今や、電話が非人間的なものだなんて、誰も思わないだろう。急速に普及しはじめているファクシミリや留守番電話に比べると、肉声がリアルタイムで聞こえる電話というのは、かなり生々しいとさえ感じられる。

*

「耳をダンボにする」という死語はさておき、電話での会話が生々しいという感覚は、今ならより共感を得られるのではないだろうか。「急速に普及しはじめたファクシミリや留守番電話」は下火になり、昨今はメールが主流になった。同じエッセイで、ネットの言葉については以下のように書いている。

*

パソコン通信上で交わされている言葉を観察すると、書き言葉と話し言葉とが、限りなく近づいてきているなあと思うことがある。特に、リアルタイムのチャットといわれるおしゃべりなどがそうだ。「あ、〇〇さんがきた!」「もう、そろそろ寝よつと」「そうそう、このまえ話題になつた〇〇のことなんだけど」といった具合。言文一致の新しい局面、といったら大げさだろうか。

いっぽうで、お互いの意見やメッセージを書き込む掲示板のようなスタイルの場では、やわらかめの書き言葉が多い。そこに文章を書いている人は、文筆を仕事にしているわけではなく(なかには文筆業の人もあるが)ごく一般の人たちだ。そういった人たちが、これほどまでに頻繁に、しかもなかば公に向かつて、ものを書くということをした時代が、かつてあつたのだろうか？ パソコンという道具を手に入れることによつて、「ものを書く」という時間が、人々のあいだで急速に増えているように思う。そういう意味では、書き言葉としての日本語が、一部の人のものから多くの人のものへと開放されたとも言えるだろう。

もちろん、そのためにさまざまな問題もおこっている。ルールやマナーを無視した、人を傷つけたりする、無責任な書き込み。誰もが発言、発信できるという素晴らしさの陰には、誰もが発言、発信できるという恐ろしさがある。新聞の投書の場合には、採用可否かというふるいがかけられるが、パソコン通信の場合には、それが無い。明らかにひどいものを、事前にチェックする機能はあるも

の、あとは個人の良識にまかされている。こういう便利で素晴らしい道具を手に入れたことをきっかけに、普通の人が普通に使う書き言葉としての日本語の、足腰が **Gキタ** えられなくては、と思う。

*

書き言葉と話し言葉は、いつそう近づいてきている。ネットのメリットとデメリットについては、25年前も今もほとんど変わらないと感じる。そして④「ルールやマナーを無視した、人を傷つけたりする、無責任な書き込み」が、社会の大きな問題に育ってしまった25年でもあった。

一番の違いは、ネットはもはや新しい場所ではなく、日常のものだということだろう。ここで取り上げているのはパソコン通信がメインだが、その後スマホが普及し、SNSが登場した。「書き言葉としての日本語が、一部の人のもの」という感覚は、今の若者にはほばないだろう。最後に記した「普通の人が普通に使う書き言葉としての日本語の、足腰をキタえる」ことが、よりいつそう重要になってきた。

言葉が生きる力とも言える時代に、どんなトレーニングが有効だろうか。自分の発した言葉が、真に「生きる言葉」となるために大切なことは何だろうか。あるいは生きた言葉とは、どんな表情をしているのだろうか。本書では、そういったことを意識しながら、現代の言葉にまつわるあれこれについて考えてみたい。

今一番気になる場所として、まずネットを話題にしたが、元より言葉が **Hカツヤク** するのはネットだけではない。できるだけ **Iハバ** 広い現場を歩く気持ちで書いていこうと思う。子ども時代の言葉や、**Jシバイ** の言葉、あるいは日本語ラップや小説、AI、そしてもちろん、私自身のフィールドである現代短歌や和歌の世界も。あれこれ考えるその道のりを、一緒に楽しんでいただけたらと思う。言葉を生かすためには、まず自分が **ホ** 愉しみ、言葉と仲良くなることが大事だから。

問一 傍線部①「グラデーション付きで伝わってゆく」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から選び、符号を記せ。

ア 小さなコミュニティでコミュニケーションを行うと、小さいころからお互いに分かり合っているだけに、同じ言葉を発しても自分の思いが様々な形で曲解されるということ。

イ 小さなコミュニティで気心知れた相手とコミュニケーションを行えば、言葉以外の身振りや雰囲気によって自分の気持ちを相手に伝達しやすくなるということ。

ウ 小さなコミュニティにおける限定された相手とのコミュニケーションでは、発言の内容が、言葉の背景に応じて様々な意味合いを帯びながら理解されていくということ。

エ 小さなコミュニティでも多くのコミュニケーションをしていかなければならないのが現代社会であるため、状況に応じて徐々に言葉をつかいこなせるようになる必要があるということ。

オ 小さなコミュニティでコミュニケーションを行った場合、発した言葉が人から人へと伝わっていく内に、内容が連続的に変化して伝播してゆくとということ。

問二 傍線部②「違うルールで高速道路を走っている」とあるが、この比喻表現はどういう状態を表したのか。六十字以内で説明せよ。

問三 傍線部③「『ん?』と思って」とあるが、筆者が「『ん?』と思つ」たのはなぜか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から選び、符号を記せ。

ア 若い男の子の発言内容をうまく聞き取ることができず、耳を澄まし集中して聞く必要があると考えたから。
イ 「面と向かう」という言葉の意味をよく理解できておらず、公共の場で堂々と間違って使用していたから。
ウ 電話は面と向かえない時に用いる道具であるはずなのに、目の前にいる相手に対して電話をしていたから。
エ 電車内であるのに、大きな声で話す若い男の子のマナーに反した行動が信じられず、不快感を覚えたから。
オ 目の前の人に使う「面と向かう」という言葉を、直接顔を合わせない電話での通話を表すのに用いたから。

問四 傍線部④「『ルールやマナーを無視した、人を傷つけたりする、無責任な書き込み』が、社会の大きな問題に育ってしまった25年でもあった」とあるが、このような変化が起こったのはなぜか。五十字以内で説明せよ。

問五 本書『生きる言葉』の「おわりに」の部分で、筆者は次のように述べている。その内容を踏まえると、筆者は「生きる言葉」をどのようなものとして捉えていると考えられるか。百二十字以内で説明せよ。

スポーツ、音楽、手芸……趣味というものはたくさんあるけれど、手ぶらでスタート地点に立てるものは、なかなかない。が、短歌の場合、道具とも言うべき日本語は、とつくに手にしていて扱える状態だ。だから私は誰彼となくおすすめしている、短歌を作ってみませんか？ と。楽器で言えば、すでに音は出る状態なのだから。そこから、さらによい音色を出すことができれば、日々はきっとより楽しいものになるはず。本書で見てきたように、言葉の力は生きる力に直結する。

(中略)

五七五七七という小箱に、自分なりの言葉を詰めながら、眺めたり、位置を変えたりしてみる。別の言葉のほうがいいかなと入れ替えたりする。そんなふうに時間をかけて言葉をつむぐ場面が、昨今どんどん少なくなっているのではないだろうか。秒で言葉を届けられる時代だが、だからといって、秒で言葉をつむがなければならないわけではない。でも、そうしないと、できるのにしていないみたいな気持ちになってしまう。

友に送ったメールの返事を待つ二時間 五日は待てた手紙の頃は 村田知子

NHK短歌の入選作に、こんな一首があった。便利になったぶん、待つことが苦手になった私たち。お互いがせっかちに言葉を投げ合うまえに、ほんの少しでも立ちどまることを、大事にしたい。歌を詠むことは、そんな習慣をもたらしてくれるだろう。

雨の日も風の日も太陽が照りつける日も、人生が上り坂でも下り坂でも、私たちは言葉をつかって生きている。

傘だった言葉を閉じて歩くとき杖ともなりてゆく空の下

言葉は、世界とともに歩く頼もしい相棒だ。

問六 波線部 A～J のカタカナをそれぞれ漢字に改めよ。

〈四十点〉

《二》 栄次郎は聾学校の理髪科講師である。その生徒の一人である正一は二歳の頃に聴力を失い、十三歳となった現在は聾学校に通っている。聾学校で正一は他の子と打ち解けようとせず、とうとう同級生と喧嘩をした。以下の文章を読んで、後の問いに答えよ。(字数制限のある問題については、句読点も一字に数える。)

つぎの日から、正一は学校に来なくなった。教室では変わらず授業が進められたものの、※《池》を含めて、生徒たちは正一のことをどこか気にしている様子だった。

三日経っても現れないので、放課後に正一の家を訪ねることにした。正一の家は、※盲聾学校がある二軒屋町から自転車で三十分ほどの国府町にあった。五森家は地主であると聞いていたが、思っていた以上に立派な屋敷だった。

《池》のように貧しい生まれも苦労するが、裕福な家庭に生まれた※ろう者もそれはそれで大変なのだろう。お手伝いに声をかけて、聾学校の講師であると伝えたと、すぐに正一の母が現れ、客間に通してもらった。来る途中で買った手土産を渡す。

「わざわざ申し訳ありません」

母は畳に手をつけて、礼儀正しく頭を下げた。

「いえ、正一くんは元気ですか？」

「身体の方はなんともないんです。ただ、どうしても行きたがらなくて、私の方もご相談に上がろうかと迷っていたところでした」学校での《池》とのやりとりを伝えるべきかを A 逡巡していると、母は①思いがけないことを切り出した。

「じつは、先生に申しあげるのは失礼かもしれませんが、夏休みのあいだに、親戚の集まりがあったんです。そのとき、正一を聾学校なんかに通わせるなど主人が責められ、口論になりました。親族には正一のことを恥ずかしい、隠したいという者もあります。きっと正一も大人たちの本音を読唇と表情で読みとったんでしょう」

「そんなことが」

「でも聾学校にうつってから、正一が少し元気になって、ホッとしていたのですが」

母はさりげなく涙を拭いた。

「正一くんは今、どこに？」

「屋敷の裏にいます。よければ、顔を見にいつてやってください」

日が傾いて、秋の深まりを感じた。水路の近くにしゃがみこんでいる正一の背中を見つける。肩を叩くと、驚いたような顔でふり返ったが、すぐにまた顔を伏せた。

「久しぶりだね」

反応はない。

「ここ、いい？」

正一が肯いたので、栄次郎はとなりにしゃがみこむ。

「このあいだのことは気にしなくていいよ。みんなも君のことを心配してるから、明日は学校に来たらどうだい？」

正一は俯いたまま、枝で地面にでたらめに線を描いている。

「お母さんから少し話を聞いたよ。親戚にひどいことを言われたんだってね」

正一はこちらの手話を横目で見るものの、描くことをやめようとしない。栄次郎はため息を吐いて、しばらく周囲を眺めた。近所の家から出てきた初老の女性が、少し離れたところを通りすぎていく。手話を見ていたらしく、挨拶もせず **B** 訝しがっていた。

背も伸びきらない子どもなのに、正一はなんと孤独なのだろう。たしかに豊学校には彼と同じ境遇の子たちがいる。けれど周囲から植えつけられた、ろうは恥ずかしいという意識のせいで一人だけ馴染めない。それに豊学校に通うだけで、親族から **C** 後ろ指をさされて家族が責められる。

そのとき、仕上がった絵に、栄次郎は目を留めた。

「この二人は誰？」

正一はおそろおそろといったふうに手を動かす。

「僕の耳」(お父さん) (お母さん) (幸せ) (違う)

僕が聞こえないせいで、お父さんやお母さんを不幸にさせています――。

「そんなことはないよ！」

栄次郎は強く否定し、正一を励ます。へきとお父さんもお母さんも、君のことを誇りに思っているから――

しかし正一は目を逸らすだけだった。

秋晴れの夕空は美しく輝いているが、**②** どんな絶景も正一の心を晴れやかにはしてくれないだろう。指導する立場なのに、なにもしてやれないことが申し訳なく齒がゆかった。

「せんせい！」

そのとき、遠くの方から、聞き慣れた声が飛んできた。

ふり向くと、理髪科の子たちが手をふりながら、ぞろぞろと歩いてくる。

「どうしたんだ？」

学校からここまで徒歩で二時間弱はかかるのに、正一以外の、六名全員が集まっていた。

「先生が今日、正一の家に行くって言っていたから」

みんなを代表して(池)が答えたあと、正一に(元氣そうじゃないか。今から一緒に遊ぼう)とあっけらかんとほほ笑みかける。

(バカだな)と、別の子が(池)を小突く。

「どうしてさ」

(正一だって、じつは病気かもしれないだろ。おまえと違って、正一は頭がいいから風邪を引いたりするんだ)

(僕だって風邪くらい引くよ)

ふざけている(池)の肩を、正一が立ちあがって叩いた。

③ (どうして?)と、正一が訊ねる。

(どういう意味?)と、(池)が訊き返す。

(僕) (君たち) (ひどい) (謝る) (ない)

僕は君たちにひどいことをした、謝ってもないのに――。

④ 正一の拙い手話を、(池)は慣れているのか読みとってくれた。(なにを言っているんだよ)と、(池)は肩をすくめたあと、正一のことをまっすぐ指さした。

(君) (僕たち) (仲間)

君は僕たちの仲間だろ――。

両手をぎゅっと重ねて組むという手話は、通常(友だち)という意味だが、このときの(池)の力強い表現は、(仲間)という方がふさわしかった。正一は戸惑った表情を浮かべながら、同じ手話をやり返す。

(仲間?)

(そうだよ)と、(池)は笑った。(正一くんは嫌かもしれないけど、僕たちは同じ、ろう者だ。ろう者の仲間が困っているときは助ける。それが僕たち、ろう者の決まりだ。僕のお父さんは、いつもそう教えてくれる)

正一はしばらく立ち尽くし、呆然としていた。

代わりに他の生徒たちが正一を囲んで、手話で伝える。

〈明日、学校に来てよね〉

〈今度は、僕にも勉強を教えてください〉

〈卒業するまで一緒に頑張るぞ〉

そのときだった。とつぜん正一が、大粒の涙をこぼしはじめた。

〈どうした？〉

それまで表情の乏しかった正一が、感情をあらわにしている。周囲の反応にも構わず、ただ泣きじやくる正一に、〈池〉が〈どうしたんだい？ なにか悲しいことでもあった？ 僕たちに話してよ〉と、目を見つめながら訊ねる。

〈僕〉〈前〉〈学校〉〈いつも〉〈一人ぼっち〉

^aぎこちないが、正一は一生懸命に手を動かした。

〈僕〉〈聞こえない〉〈だから〉〈友だち〉〈違う〉

正一は前の学校でいじめられていたのかもしれない、と栄次郎は悟った。聞こえないせいで仲間外れにされ、疎まれた。そんな悲しい過去について、正一ははじめて勇気を振りしぼって伝えようとしている。 ^b変わるうとしている。そんな正一のことを、その場の全員が固唾を ^c呑んで見守っていた。

〈前の学校〉〈ハサミ〉〈僕の耳〉〈切る〉

そのときに、僕はハサミで耳を切ったんだ――。

正一は耳の裏にある傷を、髪をかき上げて、みんなの前で指した。

〈誰かに切られたの？〉

悲しそうに〈池〉が訊ねると、正一は首を左右に振り、人差し指を自分に向けた。

^dううん、自分で切った――。

^eまさか、そんな過去があった ^fなんて。一生聞こえない耳など、もう要らないと思ったというのか。誰かに切られるよりも、正一の ^g痛みは凄惨だったかもしれない。現に、 ^hその深い傷跡はまだ生々しい。誰もなにも言えずにいると、正一は涙をぐいと拭った。そして、手を動かす。

〈僕〉〈君たち〉〈仲間〉〈ほしい〉

それは、ずっと心を閉ざしていた正一が、はじめて歩み寄った瞬間だった。

つらい過去の秘密を打ち明けることで、やっと同級生に歩み寄り、仲間になりたいという気持ちをきちんと伝えた。それは正一がろう者として生きていくことを覚悟した瞬間であり、^⑤そうさせたのは同じ境遇にいるろう児たちだった。

正一の肩を、〈池〉が抱き寄せる。すると一人、また一人と、つぎつぎにうしろから正一への抱擁を重ねた。 ^{だいだい}橙色に染まった空の下、ろう児たちは塊のように肩を寄せあい、正一と呼吸を合わせる。もはや手話が ⁱなくとも、彼らの心は共振し、ひとつにまとまっていた。

(一色さゆり『音のない理髪店』より)

※ 〈池〉――正一の聾学校の同級生の一人。〈池〉は手話で呼ばれる際のニックネームである。

盲聾哑――「盲」は視力を失っていること。「聾」は耳の聞こえないこと。「哑」は言葉を発することができないこと。

ろう者――耳の聞こえない人。

問一 二重傍線部 A「逡巡している」、B「訝しがっていた」、C「後ろ指をさされて」のここでの意味として最も適切なものを次のア～オの中からそれぞれ選び、符号を記せ。

A「逡巡している」		B「訝しがっていた」	
ア	気づかって様子を見ている	ア	自分の目を疑っている様子であった
イ	納得できず嫌がっている	イ	不審に思っている様子であった
ウ	圧倒されてひるんでいる	ウ	見分けることができない様子であった
エ	決断できずためらっている	エ	無意識に表情に出ている様子であった
オ	驚きつつ尻込みしている	オ	態度を決めかねている様子であった

C「後ろ指をさされて」	
ア	周囲から非難されて孤立して
イ	片っぱしから欠点を指摘されて
ウ	信じていたのに裏切られて
エ	手厳しく叱られて
オ	陰で悪口を言われて

問二 傍線部①「思いがけないこと」とあるが、なぜ「思いがけない」のか。その説明として最も適切なものを次のア～オの中から選び、符号を記せ。

ア 栄次郎は、正一が学校に行きたがらない理由を〈池〉らにどう謝ればいいのかわからないせいだと考えていたが、正一の母は、正一が学校に行きたがらない理由が学校でのトラブルとは無関係だと考えていたから。

イ 栄次郎は、正一が学校に行きたがらない理由が学校での喧嘩のせいだと考えていたが、正一の母は、正一が学校に行きたがらない理由として親族が抱いているろう者への差別意識を話題にしたから。

ウ 栄次郎は、正一が学校に行きたがらない理由が喧嘩で同級生に負い目があるせいだと考えていたが、正一の母は、正一が学校に行きたがらない理由を追及するため豊学校への批判を展開し始めたから。

エ 栄次郎は、正一が学校に行きたがらない理由が他の子と打ち解けられないせいだと考えていたが、正一の母は、正一が学校に行きたがらない理由を、正一が読唇能力を使い続けることに疲れ果てたことだと思っていたから。

オ 栄次郎は、正一が学校に行きたがらない理由が豊学校に通うことを忌避しているせいだと考えていたが、正一の母は、正一が学校に行きたがらない理由は親族が普通の学校を勧めていることだと考えていたから。

問三 傍線部②「どんな絶景も正一の心を晴れやかにしてくれないだろう」とあるが、栄次郎はその理由をどういうことだと考えているか。百字以内で説明せよ。

問四 傍線部③「へどうして?」と、正一が訊ねる」とあるが、正一はどういうことを疑問に思ったのか。六十字以内で説明せよ。

問五 傍線部④「正一の拙い手話」とあるが、その拙さを表すために、本文ではどのような表現上の工夫がされているか。同級生の手話と比べながら説明せよ。

問六 傍線部⑤「そうさせたのは同じ境遇にいろろう児たちだった」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを次のア～カの中から選び、符号を記せ。

ア 豊学校の同級生が正一に仲間として寄り添うことで、前の学校で孤立していた正一が同級生に秘密を打ち明け、仲間になりましたという気持ちを伝え、ろう者として生きていくことを覚悟したということ。

イ 前の学校でろうであることにより孤立していたという過去を打ち明ける覚悟を正一が決めたことが、正一と〈池〉たちが互いに歩み寄り、真の仲間として心の底から通じ合えるような強い絆を生み出したということ。

ウ 正一のことを友として心配し、寄り添おうとする豊学校の同級生の態度が、正一に、前の学校で自分の耳を切られるような凄惨ないじめに遭っていた過去を告白する勇氣と、ろう者として生きていく覚悟をもたらしたということ。

エ 正一がつらい過去を打ち明け、〈池〉たちに歩み寄り、同じろう者として仲間になりたいという覚悟をもう一度決めることができたのは、喧嘩をしたにも関わらず自分のことを気遣ってくれる〈池〉たちの優しさによってであるということ。

オ 正一と同じように社会から疎外されてきたという経験を共有できる豊学校の同級生の存在が、正一にろう者として彼らと一緒に生きていく覚悟をさせることを経て、正一が前の学校でのつらい出来事を告白するに至ったということ。

カ 正一がいじめられていた過去を詳細に告白し、〈池〉たちと仲間になりたいという気持ちを伝え、ろう者として生きていく覚悟を決めることができたのは、一度は自分を仲間はずれにした〈池〉たちが、歩み寄ってくれたからであるということ。

問七 波線部 a「ぎこちないが、正一は一生懸命に手を動かした」を例にならって単語に分けよ。

例 私／は、／中学生／だ。

問八 波線部 b「変わる」、c「呑^のん」について、活用形をそれぞれ記せ。

問九 波線部 d「ううん」、e「まさか」、f「なんて」、g「痛み」、h「その」、i「なく」は、次のア～コのどれに該当するか。それぞれ適切なものを選び、符号を記せ。なお、同じ符号を二度以上使ってもよい。

ア	名詞	イ	動詞	ウ	形容詞	エ	形容動詞	オ	感動詞
カ	副詞	キ	連体詞	ク	接続詞	ケ	助動詞	コ	助詞

《三》 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

京で貧乏暮らしをしていた男（文中では「※侍」とも）が、地方の任地へ赴く国守に付き従うことになった。男はその際、長年連れ添った妻を捨て去って、他の裕福な家の女を妻とし、新たな妻を伴って下向した。任国では、裕福な妻のおかげで豊かで満ち足りた生活を送っていた。

かくて思ふ様にて過ぐしける程に、この京に棄てて下りにし元の妻を、わりなく恋しくなりて、にはかに見まほしく思えければ、「疾く上りて①かれを見ばや。いかにしてかあらむ。」と、※肝身を剥ぐごとくなりければ、よろづ心すぐて過ぐしける程に、はかなく月日も過ぎて、任も果てぬれば、守の上りける供に、侍も上りぬ。

「我、由無く元の妻を去りけり。京に帰り上らむまに、aやがて行きて棲まむ。」と思ひ取りてければ、上るや遅きと、妻をば家に遣りて、男は旅の装束ながら、かの元の妻のもとに行きぬ。家の門は開きたれば、這ひ入りて見れば、有りし様にも無く、家もあさましく荒れて、人、住みたる気色も無し。これを見るに、いよいよあはれにて、心細き事限り無し。②九月の中の十日ばかりの事なれば、月もいみじく明し。夜冷にて、あはれに心苦しき程なり。

家の内に入りて見れば、居たりし所に、妻、ひとり居たり。また、人無し。妻、男を見て、恨みたる気色も無く、うれしげに思へる様にて、「こはいかでiiおはしつるぞ。いつ上り給ひたるぞ。」と云へば、男、国にて、年ごろ、思ひつる事どもを云ひて、「今はかくて棲まむ。国より持て上りたる物どもも、今日・明日、取り寄せむ。従者などをも呼ばむ。今夜はただこの由ばかりを申さむとて、来つるなり。」と云へば、妻、うれしと思ひたる気色にて、c年ごろの物語などして、夜も更けぬれば、「今は、いざ寝なむ。」とて、南面の方に行きて、二人、掻き抱きて臥しぬ。

男、「ここには、人は無きか。」と問へば、女、「わりなき有様にて過ぐしつれば、仕はるる者も無し。」と云ひて、長き夜に、dよもすがら語らふ程に、例よりは身に染むやうにあはれに思ゆ。かかる程に、曉になりぬれば、共に寝入りぬ。

夜の明くらむも知らで、寝たる程に、夜も明けて、日も出でにけり。夜前、人も無かりしかば、※部の本をば立て、上をば下ろさざりけるに、日のきらきらとさし入りたるに、男、うち驚きて見れば、掻き抱きて寝たる人は、枯々と干て、骨と皮とばかりなる死人なりけり。「こはいかに。」と思ひて、あさましく怖ろしき事、云はむ方無ければ、衣を掻き抱きて、起き、走りて、下に踊り下りて、③「もし僻目か。」と見れども、まことに死人なり。

その時に、いそぎて、水干袴を着て、走り出でて、隣なる小家に立ち入りて、今、はじめて尋ぬる様にて、「『この隣なりし人は、いづこに侍る』とか iii聞き給ふ。その家には人も無きか。」と問ひければ、その家の人の云はく、「その人は、年ごろの男の去りて、遠き国に下りにしかば、それを思ひ入りて嘆きし程に、病み付きて有りしを、あつかふ人も無くて、この夏、iv失せにしを、取りて棄つる人も無ければ、未ださて有るを恐れて、寄る人も無くて、家はいたづらにて侍るなり。」と云ふを聞くに、いよいよ怖ろしき事、限り無し。さて、云ふ甲斐無くて、帰りにけり。

まことに、いかに怖ろしかりけむ。④魂の留まりて、会ひたりけるにこそは。

《今昔物語集》巻第二十七より

※侍——ここでは、貴人に仕えて雑用などをこなす人。

肝身を剥ぐ——心が焦るさま。

部——日光を遮り、雨風をよけるための戸。上下二枚に分かれ、この場面では、下一枚を固定し、上一枚をつり上げている。

問一 二重傍線部 a「やがて」、b「あさましく」、c「年ごろの」、d「よもすがら」のここでの意味として最も適切なものを次のア～オの中からそれぞれ選び、符号を記せ。

a「やがて」					b「あさましく」				
ア	最終的に	イ	そのうち	ウ	途中で	エ	ただちに	オ	徐々に
c「年ごろの」					d「よもすがら」				
ア	若いころの	イ	今後の事の	ウ	年齢相応の	エ	今年の事の	オ	ここ数年の
ア	身を寄せて	イ	一晩中	ウ	心をこめて	エ	深夜まで	オ	寝所で共に

問二 波線部 i 「遣^やり」、ii 「おはしつる」、iii 「聞き給ふ」、iv 「失^うせにし」の動作主として適切なものを、次のア～キの中からそれぞれ選び、符号を記せ。なお、同じ符号を二度以上使ってもよい。

ア 侍 イ 国守 ウ 元の妻 エ 新たな妻 オ 侍の従者 カ 隣家の人 キ あつかふ人

問三 傍線部①「かれを見ばや」を、指示対象を明らかにして現代語訳せよ。

問四 傍線部②「九月の中の十日ばかりの事なれば、月もいみじく明^あし」の前半部は「陰暦九月で、中旬に入ってから十日程経^たった日のことなので」の意である。この時の「月」の形として最も適切なものを次のア～オの中から選び、符号を記せ。

ア



イ



ウ



エ



オ



問五 傍線部③「『もし僻^{ひがめ}目か。』と見れども、まことに死人なり」を、「僻目」の内容がわかるように、言葉を補って現代語訳せよ。

問六 傍線部④「魂の留^{とど}まりて、会ひたりける」とあるが、これは誰のどのような心情がもたらしたものか。説明せよ。

〈二十点〉